



Title	フッサール最晩年の思想：世代発生的問題と現象学の自己批判
Author(s)	前田，直哉
Citation	大阪大学，2009，博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49393
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【18】				
氏 名	まえ	だ	なお	や
	前	田	直	哉
博士の専攻分野の名称	博 士（文 学）			
学 位 記 番 号	第 2 2 5 9 9 号			
学 位 授 与 年 月 日	平成 21 年 3 月 24 日			
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当			
	文学研究科文化形態論専攻			
学 位 論 文 名	フッサール最晩年の思想－世代発生的問題と現象学の自己批判－			
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 入江 幸男			
	(副査) 教 授 浜渦 辰二 准教授 舟場 保之			

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、フッサールの『デカルト的省察』末尾で示唆された現象学的意味での「形而上学」の可能性を念頭に置きつつ、その著作では明確に解明されことなく残された二つの問題系、即ち「世代発生的問題」ならびに「現象学の自己批判」について検討したものである。本論文は、序論と三つの章と結論からなり、400字詰め原稿用紙に換算して約540枚の分量である。

「第一章 世代発生の現象学」では、フッサールが「世代発生的問題」という名称で一括した問題圏を四つの領野(生物学的個体発生と系統発生、心理学的な個体発生と系統発生)に分類した後、スタインボックが『故郷と彼方』において展開した「世代発生的現象学」の方法を詳細に検討する。スタインボックが提唱する新たな方法は、世代発生的連関の中で「生の繁殖」に関わる側面、つまり生物進化の過程のうちに事実上、看取される「目的論」的過程や、一人称の「誕生と死」といった現象を、故郷世界における「意味の伝播」へと一元的に還元するものであった。こうした方法を導入することによって、例えば文化人類学が対象とするような様々な事象への現象学的な接近が可能になる。しかし、筆者は、その方法が、超越論的現象学における「事象そのもの」の最も深い次元に肉薄する究極的な方法であるかのような装いをもって導入されている点について批判を免れないことを、従来の論争を整理しつつ指摘する。

「第二章 現象学の現象学」では、現象学の真の究極的な次元を主題化する方策として、晩年のフッサールの共同研究者であったフィンクの『第六省察』を取り上げる。フィンクによる現象学の再帰的な自己批判の試みは、「超越論的に構成する自我」と「超越論的現象学を遂行する自我」の「存在対立」の議論を出発点としつつ、「内世界化」された「人間自我」を媒介として、最終的に存在と先存在の弁証法的統一としての「絶対者」概念に到達するものであった。これに対してフッサールは「存在対立」を疑問視し反論した。しかし、両自我の同一性の事後的確証に一切を委ねようと試みるフッサールの思索に対して、戦後のフィンクは、隠されたまま「操作的に」機能する「思索の影」が付きまとっていると批判を向けていたことを明らかにする。

「第三章 現象学的形而上学」では、フッサールがフィンクと共に取り組んだ「現象学的形而上学」の可能性を検討する。フッサールの最後の思想的境地は、「生き生きた現在」をめぐる「後期時間論」及び「普遍的目的論」の構想とともに検討されねばならない。フッサールは、前者に関して「原自我」と「先時間的な流れること」のいず

れに先行性を認めるかについて動揺を示すが、筆者は「原ヒュレーの変転」に優先権が与えられたと解釈する。また普遍的目的論に関しては、そのイデアールなテロスが時に、一神教的な超越神と同等視されていたことを明らかにする。このような「現象学的形而上学」に対して、スタインボックもまた「大文字の世代性」という概念を導入して、従来の認識論的な枠組みを超えて、宗教的あるいは道徳的次元へと積極的に道を開こうとする。

本論文の最終的な到達地点は、フッサール現象学やフィンクが行なった解釈学的分析によって根本的な「地平性」概念に対して、スタインボックによる「垂直性」概念の導入を承認することにより、フッサールが現象学の規定において等置した「究極的な基礎付け」ならびに「究極的な自己責任」のうち、倫理的意義を強調した後者を積極的に継承することである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、スタインボックの「世代発生的現象学」とフィンクの「現象学の自己批判」という、一見、思想背景も年代も問題意識も異なる新旧二人の現象学を対比させて、晩年のフッサール現象学の帰趣を見定めようとする力作であり、ユニークな発想、問題設定による行論は見るべきところが多く、相当の力技であると思われる。

スタインボックの「世代発生的現象学」は、世代の連鎖を現象学の立場でどのように説明するか、という重要な問題に答えるようとするものであり、スタインボックはこのために、「静態的現象学」「発生的現象学」につづく第三の方法として「世代発生的現象学」を提唱した。これについては、すでに多くの批判が向けられており、筆者はG. ソファ、B. ホブキンス、R. ブルジーナの批判を紹介吟味して、スタインボックを全面否定するのではなく、その意義を救い出すことに成功しているといえるだろう。それは、次の3点にまとめられる。(1)「世代発生的現象学」を現象学の究極的な方法とするのではなく、現象学の三つの方法が力動的に循環する必要があること、(2)「世代性」が現象学のもっとも深い次元の水準に位置するのではないとしても、自我／他我ではなく故郷／異郷へ定位することによって、従来の現象学が看過してきた「具体的」文化的諸現象へのアプローチが可能になったこと、(3)「現象学的営為」を歴史性、世代性にたいする「参加」と捉え、その倫理的な側面を前面に押し出したこと、である。フィンクの『第六省察』の分析では、『ブリタニカ草稿』をめぐるフッサールとハイデガーの対立からフィンクが影響を受けていることを踏まえつつ、戦後のフィンクの業績をも含めて、フィンクとフッサールの「現象学の現象学」の立場の違いを周到に描出することに成功している。例えば「言語の還元」をめぐるフィンクとフッサールの異なる立場の分析は興味深いものであった。筆者は、従来独立に扱われてきた「世代発生的問題」と「現象学の現象学」という問題が、「原事実」に関与する「現象学的形而上学」に深く関わることを指摘して、「生き生きとした現在」の問題系を「大文字の世代性」として読み解こうとするスタインボックの試みを評価している。筆者は本論文によって、確かにフッサール最晩年の思想を継承する一つの方法を示すことに成功していると思われる。

しかし、本論文にも問題がないわけではない。本論文では、スタインボックの「世代発生的現象学」とフィンクの「現象学の現象学」を詳細に吟味検討して、フッサールの最晩年の思想をどのように発展させるかに重点が置かれているために、本論文のタイトルが示す「フッサール最晩年の思想」そのものを詳らかにするという点では物足りない点が残している。また、一つ一つの文章は明晰なのだが、多くの論点が詳細に語られるために全体の論旨が読み取りにくいところがあり、読ませる文章にはなっていないことが惜しまれる。

以上のような問題点は残すものの、それは本論文におけるフッサールの後期思想についてのスタインボックとフィンクの研究方向についての、総括と展望の意義を損なうものではない。従って、本論文を博士(文学)の学位にふさわしいものと認定する。